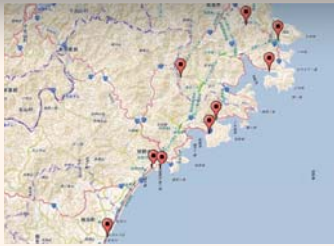


熊野の
木林から



尾鷲市から熊野市にかけての海岸付近には「鬼」の意味を持つ地名が散在。いずれも修験道と関係した地名であり、当時の水軍が鬼のように恐ろしかったためにつけられた地名ではない。修験道の霊力や法力への尊敬を「鬼」の文字に込めたという。(地理院地図電子国土Web標準地形図を加工)

怪野の熊野

其の二 「鬼(其の一)」



和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

民話などを調べていて思うのだが、熊野には鬼の話は多くない。熊野の鬼は恐ろしい存在だと認識されていなかったのかも知れない。関係あるかどうか不明だが、尾鷲から新宮にかけて鬼の字を使った地名が散見される。尾鷲市には七鬼の滝、八鬼山があり、市木(二木)、二木島、三木浦、遊木四木、九木浦、木本の「木」の文字はいずれもかつ

ては鬼の字が使われていたといえる。これら鬼の地名は修験道と関わっていて、鬼が棲(す)む恐ろしい場所という意味ではない。九鬼水軍を作り上げた佐倉中将も九木浦に移った後に九鬼に改姓しており、それまでは藤原姓だった。

熊野に五鬼の地名は見当たらないが、修験道の開祖である役小角(役行者)に仕えた鬼の夫婦、前鬼(ぜんき)と後鬼(ごき)の5人の子ども達は五鬼である。五鬼は現在の下北山村大字前鬼に宿坊を開き(五坊、五鬼継(ごきつぐ)、五鬼熊(ごきくま)、五鬼上(ごきじょう)、五鬼助(ごきじょ)、五鬼童(ごきどう)家の祖となった。五鬼助家は今も前鬼で宿坊を経営されている。五鬼継家、五鬼上家は前鬼から離れたが、今でも家は存続。五鬼熊家、五鬼童家は断絶されてしまった。六鬼に関しては調べられなかったが、碌(ろく)なことが無いという意味で避けられたともいう。

熊野、紀伊半島の鬼は、他の地域のような角の生え



修験道の開祖である役小角(役行者)に仕えた鬼(または式神)の夫婦、前鬼(ぜんき)と後鬼(ごき) (富飾北斎「北斎漫画」、国会図書館近代デジタルライブラリーより転載)

た恐ろしい鬼とは別の存在で、修験道の霊力や法力への尊敬を鬼の文字に込めたようだ。木本に残る坂上田村麻呂による鬼退治にしても、鬼のように凶悪な海賊の多娥丸(たがまる)、つまり人間を退治したという話である。多娥丸の頭は埋められ、その上に社殿を建てて祀(まつ)ったのが木本の大馬神社の始まりとされている。朝廷側からみたら鬼だったのであるが、鬼とされた多娥丸の実際はどうだったのだろうか？

熊野には鬼の話は少ないが、やはり恐ろしい鬼は避けたいもので、節分にトゲのある植物アリドオシを「鬼の目突き」として玄関の戸に飾って鬼よけする。他の地方における節分の「鬼の目突き」は一般にはヒイラギのことだから、ここでも熊野は他の地方とは異なった文化、風習をもっていることがわかる。

中島敦司(なかしま・あつし)教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。51歳。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

